

第2回「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」有識者懇話会 議事録

1 日 時：令和7年（2025年）11月10日（月）10:00～11:30

2 場 所：TKP札幌ホワイトビルカンファレンスセンター ホール2B

3 出席者：「出席者名簿」のとおり

4 議 題：

- (1)北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン改訂素案（案）について
- (2)意見交換

5 議 事：

(1) 開 会

○事務局（眞鍋参事）

第2回「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」有識者懇話会を開催する。開催に当たり、北海道経済部次世代社会戦略監の大矢からご挨拶を申し上げます。

○大矢次世代社会戦略監

第2回「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」有識者懇話会の開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。

第1回に引き続き、お忙しい中お集まりいただき、お礼申し上げます。さらに、この懇話会以前にも、個別の資料のご説明等のお時間をいただき、感謝申し上げます。本日も様々なご意見をいただければと思っている。

前回の懇話会では、コンセプトや基本的な考え方をお示しし、今回、やっとな具体的文字に落とし込んだものをお示しさせていただく。まだ言葉遣いとして曖昧な部分や、概念図についてもきちんと推敲し切れていない部分もあるかと思うが、こういった段階で皆様方からご意見をいただきたい。

今回は、特に「第4章 めざす姿」を中心にご議論いただき、それを元に素案とし、パブリックコメントを行うという流れにしたいと考えている。

本日の時間は限られているが、我々も様々な議論をしていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

○事務局（眞鍋参事）

本日のご出席者は、出席者名簿にてご紹介に代えさせていただきます。

(2) 北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン改訂素案（案）について

○事務局（眞鍋参事）

10月下旬には、お忙しい中お時間をいただき、今回ご議論いただく素案のたたき台、特に第1章から第3章までの情勢変化を踏まえた更新箇所を中心に、皆様へ個別にご説明しご意見をいただきました。

本日は、今回の改訂の主眼である第4章及び第5章のAIの活用による地域課題解決に向けた流れなどについて、ご議論いただきたい。

なお、皆様からの主なご意見とその反映状況については、参考資料2をご参照いただきたい。

ここからの進行については、中村座長にお願いする。

○中村座長

今回は会場に行こうと思っていたが、やはりスケジュールが合わなかったため、Zoomで進行させていただく。皆さんにご不便をおかけするかと思うが、ご協力をよろしくお願ひしたい。

それではまず、事務局から改訂素案（案）について説明をお願いする。

○事務局（江刺主幹）

それでは、資料1「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン改訂素案（案）」について事務局から説明する。

（資料1について説明）

(3) 意見交換

○中村座長

第1回懇話会で皆さんからざっくばらんにお話をいただいたことと、10月の個別ヒアリングをしていただいた際の意見が、参考資料2「主なご意見と改訂素案（案）への反映状況」のとおり、第1章から第3章に盛り込まれている。

今日ご議論いただきたいところは、主に第4章。40ページの「めざす姿」で、まず、複合拠点を実現するという点に関しては、皆さんからたくさんご意見をいただいております。「複合拠点」という名前が出てくるけれども、それは何か」という感じだったので、複合拠点の概念をより詳しく説明していただいて、左の丸で示した図の他に、複合拠点の構成イメージとして、「千歳のラピダス社を中心に進めていく」ということを書き加えていただいている。

前回までは、「地域拠点」というように、地域の中に拠点をつくるような感じの言葉が書いてあったが、策定時の懇話会でも、「そもそも地域に拠点ができるのか」、「それは何なのか」というような議論があり、そのときも、「地域拠点はいろいろなものを

立地したり波及を受けたりするところ」というくらいで、はっきりしなかった。今回、皆さんへのヒアリングでもご意見をいただき、道にすっきりする形で整理していただいた。

41 ページは、今までは、複合拠点と、各地方につくられる地域拠点がつながるような感じだったが、もともと地域拠点なるものをつくるということではなかった。まずは複合拠点をラピダス社で実現させて、それを契機とした投資や雇用、関係人口全体の効果を北海道全体に積極的に取り込み、地域の付加価値向上は、半導体産業だけではなく、全道の産業の付加価値が向上するような関係とし、それによって地域の優位性を発揮して需要を取り込むという話を新しく打ち出している。

そして、42 ページ、ここが皆さんからヒアリングで特にご意見をいただいたところ。特に第1回のご議論いただいた、左側の「再エネの供給」で、道内の再エネの利活用によりデータセンターができたり、半導体産業が集積するというのは分かるが、それによって全道の産業の付加価値が上がったり、右の「全道をデジタルパークに」というようなことが起こることはない。このつながりが分かりにくいということで、皆さんには第1回懇話会とヒアリングでかなり議論していただいた。

事務局からの説明でお分かりになったかもしれないが、真ん中の「道内での AI データセンターの利活用」の下のところを書いてある、「地域ニーズと企業シーズのマッチング」が今回の打ち出しのメイン。AI データセンターや半導体関連産業が集積するだけだと、なぜ全道に効果が波及するかが分からないし、その理由も分からないし、必然性もない。今回の打ち出しは、何もしなかったら、地域課題先進地の北海道で、暮らしや産業での地域の様々な課題はそのままになるので、AI データセンターと半導体関連産業の集積を生かした形で政策を打つということ。これをするときに、通信インフラでネットワークや送電インフラを整備し、右側にあるように全道をデジタルパークにしていく。「全道をデジタルパークに」と書いてあるが、前回は、デジタルパークなるものをつくるのかというように読めていたが、そうではなくて、北海道全体をあたかも一つのデジタルパークのようにしましょう、ということを知りやすく書いていただいた。

今回ご議論いただきたいのは、特に 42 ページと 44 ページ。デジタルの好循環は、AI、半導体集積をしても何も起こらないので、全道展開して地域ニーズと企業シーズをマッチングするような政策を打って全道展開し、全道をデジタルパークにするため、こんなことをしますという形になっている。今回は、これが大きなポイントで、ここに尽きると思っていて、皆さんの意見もここが中心になっている。この辺を中心にざっくりばらんにご意見をいただきたい。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

41 ページのめざす姿④-1 と、42 ページの④-2 の関係についてはどのように考えたと良いか。

それから、今の座長のご説明になかったが、45 ページ以下について、方針 1 から方針 3 までと方針 4 以降で色が違うのは深い意味があるのか。公表時に色が違うと、疑問を持たれるのではないか。

○事務局（浦田室長）

まず、41 ページと 42 ページについては、このページから半導体エコシステムという言葉を一且載せていない状態にしている。ただ、半導体エコシステムを削除したままにしたいとは思っておらず、その説明文をどこかに加えたいと考えている。半導体エコシステムの定義については、41 ページと 42 ページを合わせた形になるのではないかと考えている。

41 ページは、人、物、金の経済の循環というエコシステムで、一般的にエコシステムと言うときにイメージするような従来型の経済循環という姿。42 ページは、新しい考え方として、AI を使う、半導体を使うというところまでの実証を含めたもの。要は、従来型の経済循環と、AI や半導体を使うというところまでを含めた考え方のエコシステムという二面性を持って説明するのがいいのではないかとということで、この順序で 2 枚のポンチ絵をつくった。

○事務局（江刺主幹）

二つ目のご質問の色の違いについて、「課題と方針」の色と対応する形にしている。一つのテーマは「複合拠点の実現に向けて」、もう一つは「全道への効果の波及に向けて」。複合拠点の方をオレンジ色で、全道への効果の波及を青色で示している。

○中村座長

私も小高理事長と同じ意見で、なぜここで突然色が変わってしまったのかと思った。オレンジ色ならオレンジ色でも良いが、今説明されたように、複合拠点だからオレンジ色になっていて、全道への効果の波及は青色になっているということは、言われて初めて分かる。これは説明がないと分かりにくいのではないか。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

色については理解した。

41 ページと 42 ページは併記と理解すればよいか。詳細さの度合いというか、抽象度の度合いがかなり違うので、併記というと違和感がある。むしろ、④-1 を受けて、その一部について具体化したのが④-2 と理解すべきか。

○事務局（浦田室長）

併記という考え方ではあるが、小高理事長のご意見を踏まえて、順番のあり方、ボリ

ユーム感など、半導体エコシステムの定義づけを含めて検討する余地があると思った。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

逆に、42 ページが細か過ぎるのかもしれない。説明が足りない部分があったので細かく書いたが、全体のトーンの中でも 42 ページの細かさが少し行き過ぎかなというところもないわけではない。ただ、大事な流れのところなので、ここを少し表現することで、41 ページと 42 ページの違和感というか、差がある感じが抜けると思う。

あとは、2 要素といったときに、逆に 41 ページがざっくりし過ぎているという見方もあるので、ご意見をいただきたい。全道への効果の波及というものに、AI によって地域の課題を解決するという効果を循環させる、効果を全道に配ることもエコシステムとする、という新たな概念を入れたので、製造メーカーや具体的な関連産業が地域にできる、地域でつくったものが納品されるというような従前型のエコシステムと、利用という効果が回るエコシステムという 2 要素を入れて、これで全道への効果波及としていきたい。そこに対する絵や概念について、アドバイスをいただけるとありがたい。

○中村座長

私の感想を言うと、41 ページは簡単なコンセプトで、コンセプトをより具体的に事例を出しながら詳細に説明すると 42 ページになるという感じかと思う。41 ページだけでは何を言っているか分からないので、42 ページが非常に大切。これくらいは書いていないとだめだと思う。

○ミツミ電機株式会社 久米事業執行役半導体部門副部門長

今、皆さんが議論されていたことは、私も感じていたのですが、2 年前のビジョンのときは、半導体から始まってデータセンターというところを中心に、ビジョンが策定されていて、今回はそれに AI などのコンセプトが追加されたと思っている。資料的には、今、皆さんがおっしゃるとおり、42 ページが今回のビジョンの肝になる部分なのかなと理解している。

また、その前の 2、3 ページと比べて情報量が違うというのはおっしゃるとおりで、ここはページを少し増やすなりして、もう少し分かりやすくした方が良いのではないかな。

前回のヒアリングのときにもお話しさせていただいたが、ビジョンと言うからには、ビジュアルでも、ぱっと見て「こういうことだね」と分かるようにするのがいいと思うので、ここは初めて見た人でも分かるように整理できないかなと感じている。

○中村座長

個別に説明を受ければ何とか理解できるが、これだけを見て、何が書いてあるかがすっと頭に入るかと言われると難しい。これを理解させるにはもう少し説明が必要だと思

うし、この1枚だけで分かってというのは厳しいかもしれない。もしかしたら、これを説明するようなパワーポイントかポンチ絵が追加で必要かもしれない。分かりやすさを工夫した方がいいかもしれない。

○北海道大学大学院 太田教授

皆さんがおっしゃるとおり、42 ページが肝だと思うので、その肝の部分をどう展開するかという概念の整理をすべき。

私の感想を言わせていただくと、42 ページは、10 ページぐらいのボリュームがある内容なので、それくらい書いていいと思う。まさにこの改訂の肝であり、言葉の変更だけではなくて、コンセプトの変更がある。ビジュアル的に言うと、小さい絵があって、大きい絵が囲んでいるような図柄をイメージしている。

もう一つ大事なことは、そもそも論だが、もともと半導体を基軸にしてつくってきたビジョンであり、それに AI が加わることの大きな意味は、半導体だけで全道に恩恵が波及するというのは違うと思う。それを解消する意味で、AI というブリッジをかけると、地域と施策がつながると思う。そこは非常に重要なファクターなので、AI をもっと全体的に強調して、項目を立てるぐらいのやり方をした方がよい。

それから、イノベーションという言葉の使い方について、半導体、物をつくるという方に引っ張られている印象がある。物をつくるだけではなくて、使う方もイノベーションで、さっきのエコシステム概念を広げると同様に、道として考えるイノベーションの定義を広げるといいと思う。そうすると、道庁や札幌で考えたアイデアや開発された科学技術、千歳でできたものが全道に流れ込むというイメージではなくて、全道の各所から小さいエコシステムの方に流れ込んでくるというイノベーションという情報の流れができると思うし、それをつくらなければいけないと思う。そうすると、ベクトルは逆になる。行って返ってくる、あるいは、来て行くという矢印のイメージをうまく表現できないかと思う。私はそれがぐるぐる回るような絵をイメージしている。

42 ページを見ると、データセンターがあって、利活用があって、右のほうに流れて行って、デジタルパークになる。しかし、肝心なのは全道を実証フィールドとする部分であって、そこから流れが戻ってくるというか、むしろ、吸い上げていく。その流れを強調し、並列的、対等、同等に書くのがいいのではないかと思った。

○中村座長

絵の工夫も必要だが、42 ページのポンチ絵をもう少し詳しくした方がよい。あとは、特に、イノベーションや道庁がしようとしているエコシステムという言葉の定義について、「我々はエコシステムという言葉の使い方を広げていて、そういう意味でこういう絵を描いている」という説明がないと、道庁でつくった方の思いと我々の意見がうまく伝わらないかもしれないので、工夫された方がいいかもしれない。

○事務局（浦田室長）

今、42 ページのポンチ絵にかなりの情報量を詰め込んでいるので、それを分解して、かみ砕いて、少しページ数を増やして説明していくというご意見は非常に大事だと思ったので、その観点でも検討してみたい。

イノベーションの定義づけも、どうしても「作る」方に引っ張られている部分があるので、今回の AI のコンセプトを踏まえた定義づけを考えていく必要があると思った。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

今のお話は本当に重要なところだと思う。

前回、どうも腹に落ちないところがあったのは、41 ページから 42 ページにつながるところ。私は実務なので、42 ページは特に青色の部分が大事だと思った。実務から考えると、左の緑色は「できたぞ」ということで、私たちがどうやってそれを活用していくかというときに、太田教授がおっしゃったように、スライドが 10 ページあっても良いのではないか。具体的にどうシナリオやストーリーを作れるかだと思う。

私は、この 1 か月間、あえて道内のお客さん 4 か所を久々にぐるっと回ってきたが、他の地域にも十分共通するような課題があった。同じような課題については、行って戻って、そこをぐるぐる回すような今のエコシステムの書き方がすごく重要な視点だと思った。同時に、もう一つしなければならないのは、この青色のところをどう具体的に書いていくかということ、すごく難しいと思う。

例えば、「スタートアップ等と呼び込み」というのはそうだなと思うが、スタートアップ等の「等」はほかに何があるのか。私の知る限りでも、「北海道はいいね、行きたいね」という半導体系のベンチャー企業やスタートアップの方がいるわけだが、どうやって彼らに対して発信し来てもらえるかというところは、AI データセンターや半導体で頑張っているというだけで来てくれるのかどうか、この場ではなかなか回答を出せないと思うが、具体的に伝えてあげる必要があると思う。実際にここに来て、何かしらの活動をしていただくというところに至るには、もう少しメッセージ性があっても良い。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

スタートアップ「等」については、スタートアップだけではないなという思いがある。実際に新しい技術に対応するときに、大手企業とスタートアップが組んで実装まで行ってもものづくりができており、スタートアップだけではできないという現状を理解した上でスタートアップ「等」とした。既存のものづくり企業や大企業、IT企業とスタートアップの組合せで北海道に目を向けてもらい、北海道に来ていただいて、課題を解決してもらおうという意図がある。

○北海道大学大学院 太田教授

41ページの最初に、千歳、札幌に始まって、ぐんと伸びていくという概念がある。いつも思っているが、道の政策では「波及」という言葉をよく使う。波及というのは、真ん中があって、周辺に流れていくというもの。私は北海道に来て間がないので、外からの目としての感想だが、お金があって、それをどこに配るか、広げていくかというように、お金や物の流れを軸に考えているように見える。しかし、今、出来事は地方で起きている。そして、お金ではなくて、情報が逆向きに流れている。お金の流れを考えるのが政策なのか。私は、情報の流れを強くしたり支えたりして支援するのがもっと大事な政策だと思う。

波及という言葉がやや古いというか、波及だとは思いますが、それだけではない。地方が目覚めると千歳が元気になる、これは共振、レゾナンスだと思う。全道を震わせるような、それがまさに経済政策ではないかと思う。

印象として、ストーリーの流れ方が、札幌、中央、道庁から地方へ、のように見えるが、そうではなくて、デジタルになると違うことが起きるのだ、違うことが起きるのをサポートするのが道の政策なのだ、というストーリーを私は期待している。

○事務局（浦田室長）

双方向の矢印が順繰り回る、というイメージの具体例の一つが情報ということだと思うので、キーポイントになると考えている。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

肝は、めざす姿④－2で、次世代半導体は、千歳・札幌圏にとっては良いけれども、北海道全体にどんないいことがあるのかが、まさにこの1枚で示されているのだと思う。

他方で、④－1は、もともと複合拠点に加えて地域拠点とあったものを書いているというイメージだとすると、めざす姿④－2と併記するよりは、40ページのめざす姿③の複合拠点プラス半導体の製造というものを契機に、道内の地方部にもプラスの影響が及ぶ、という整理のほうが理解されやすいかなと、皆さんのご意見を聞いて感じた。

また、地域の付加価値向上と言ってしまうと全てになってしまうので、この言葉はミスリーディングではないか。

○事務局（浦田室長）

おっしゃるとおり、40ページと41ページを一体で説明すると分かりやすいと思う。また、地域の付加価値向上と言ってしまうと、これで全部完結してしまうイメージもあるので、実はその次、大事な42ページに続きがあるという関係性を、どう扱うかを考えていきたい。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

事務局の皆さん、ありがとうございます。無理難題を言っている中でいろいろと修正をいただき、よくなっていると思っている。

先ほどから議論のある41ページについて、私も何度か発言させていただいているが、北海道は、すでに、半導体、AIではないところでもポテンシャルのある島であり、そこに「半導体やデジタル、AIがやってくることによって、めちゃくちゃよくなるよね」という広げ方でいいのではないか。要は、「いい島に、新しいテクノロジーが来たらめちゃくちゃよくなります」という感じの書きぶりになってしまうのか、「後半のセクションを切り取った部分なのです」とクローズドに持っていくか、どちらかにかじ切りをしたほうがいいのかと思う。

42ページについては、いろいろご議論があったが、丁寧に説明していくと、ここは理解されると思う。これを加工していくと、何だかよく分からなくなり、無限ループになるのではないかと思うので、私の所感としては、42ページについてはこのままでいいのではないかと思う。

○中村座長

確かに、42ページは1枚でぱっと見られて、説明を聞けば分かるので、これは必要。42ページを補足するようなものもあれば良いのではないかと思った。ただ、42ページをばらばらにすると全体の構造が分からなくなるので、この1枚で見られるものは残した方がいいかもしれない。

○事務局（浦田室長）

確かに、全体の流れを一回見せて、その後、何枚かスライドを増やして説明するという考え方はあると思う。そのときに、どこをポイントにページを割いていくのかだと思うが、恐らく、青色の左側と右側、あるいは、青色の左側を地域ニーズと企業シーズのマッチング、それと社会実装に分けて、3枚ぐらいというイメージかなと思っているが、ご意見をいただきたい。

○中村座長

私は、42ページがあって、分かりづらいところを補足するような感じかなと思う。

○事務局（浦田室長）

案がないとなかなか話が進まないなので、事務局で引き取って、ご相談させていただく。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

41ページの位置づけについて、前田委員がおっしゃったように、めざす姿④-2につ

ながるような、「めちゃくちゃいいことがありますね」というのを視覚的に出すというのも、すごく魅力的なアイデアだと思った。

そうすると、地域拠点とは呼ばないにしても、半導体の製造の波及が道内地方部にもあるということ、40ページのめざす姿③に吸収して書くなどの方法もあると思う。

地方部の方は、自分たちに一体どんな良いことがあるのかについて最も関心があり、その「良いこと」は専ら42ページに書かれていて、41ページはその前振りとするのが良いと思った。

○事務局（浦田室長）

41ページの絵は、現行のビジョンにもある。その説明の中では、ラピダス社の立地を契機として、本道に優位性のある農林水産業や観光業などのスマート化を図るということで、地域にもともとある魅力や素材をさらに伸ばす原動力にしていく、という表現になっているので、そのあたりの考え方はそのまま生かせると思った。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

今のところをもう一度確認したい。

わくわくした夢のある島というのはすごく重要だと思う一方で、今回のビジョンを語る相手は誰なのかということが一つあると思う。

なぜかというと、半導体業界にいる方に語るときのわくわく感と、例えば、地方の道民の方、困っていらっしゃる方に、これからこういうことが起きるのだという語り方は違う。もしかしたら、それは道外の方でもそうしれない。

今回、道北、北見に行ってきたときに、現場や学生など、非常に多岐にわたる方に会ったが、「我がまちにこれが来るのだけれども、中村さん、未来はどうなるのですか」という質問を結構多くいただいた。私は、ビジョンにはわくわく感が重要だと思っている一方で、これを誰に語るのかが分からなかった。

また、42ページの青色のところは、ビジョンの中でどこまで具体的にストーリーを描いていくかということがあると思うし、これはきつとなければ駄目なのだろうと思っているが、このビジョンの中でどこまで粒度を細かく書いていくか、どうするのかということが頭に浮かんだ。

○事務局（浦田室長）

誰に語るのかということは前回もご議論をいただいた。基本的に道民の皆様と事業者とお答えしたが、太田教授から、外向きに尖った形でというお言葉もいただいた。

外からスタートアップなどと呼んでくるという観点ももちろん大事で、地方にも良いことがあるという観点では、地方の皆さんにも向けたものにする必要がある。特に、このページのターゲットは、総花的というか、いろいろな方向を見ながら変えていかな

ければいけないのかもしれない。

○中村座長

引き続き、第4章にご意見をいただいても良いが、第5章の進捗管理も事務局としてはご意見をいただきたいと思っている。また、第1章から第3章のところで気づいたところや、簡単な感想でも構わないが、意見があればお願いしたい。

確かに、目標値のところは、今回の打ち出しが分かるような目標値があると良い。今回はコンセプトを大分変えているので、何か一ひねりあったらいいかもしれない。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

54ページの目標値について、例えば、先ほど来議論してきた42ページのAI関連のことを推進しているかどうかを確認できるような、何らかの数値目標を盛り込むことはマストであるというのが前提なのか。

○事務局（浦田室長）

マストというわけではなく、そういった指標があったほうが進捗管理に資するだろうという考え方。実際にこのビジョンは進行中で、この指標を元に、道庁だけではなく、札幌市、千歳市、北大、科学技術大学がいろいろな事業を進めているので、ここが基本線であるということは変わらない。

AIの目標値を入れないという考え方もあることはあると思う。ただ、私どもとしては、コンセプトを反映する指標はあったほうがいいのかと今のところは考えている。そのあたりのご意見をいただければと思う。

○北海道大学大学院 太田教授

何かを足して、アドオンで新しい目標値っぽいものをつくるとしたら、AIやデータになると思う。AIは勘定できないが、データはデータセンターの数や情報処理量などを勘定できる。今、どのくらいあるか、みんなイメージできていないのではないか。石狩にソフトバンクが来る、苫小牧に来る、といういろいろな話はあるが、どのくらいのデータが来るか、そのデータに基づいて、AI開発にどのような影響があるのかを見るために、見える化できる数字があるといいと思う。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

今、AIの話があったのですが、目標はあった方がいいのだろうと思っている。

皆さんも心の中でそうだと思っていると思うが、ゴールとして北海道にいろいろな波及させていくというところに結びつけるために、AI関連案件を何件という数字をつくるのは非常に厳しい。そうすると、KPIの前に先行指標みたいなものが出てくると思うが、そ

ここにアイデアを出せと言われれば何かありそうな気はする。ただ、目標はあるべきで、それがあから頑張れると思う一方、かけ離れていない先行指標を作れるのかなと思う。

例えば、方針2に半導体に関するスタートアップと書いてある。これは、「半導体に関する」と言えば確かにそうだが、AIに関するスタートアップと言っても同じ数になるような気もしている。目標値はあった方がいいと思うが、そこはもうちょっと頑張って考えなければいけないのかなという気がしている。

○中村座長

方針1から方針4は今動いているものなので、ここの文言をいきなり変えるのではなく、AIに関するものを別に立てるのはあり得るかもしれない。今、走っているものとの関係、また、先行指標で全く関係のないKPIがひとり歩きしてしまうとよくないので、今回のコンセプトに合うKPIをうまく見つけられればと思う。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

指標に関して、先ほど調和技研の中村様からお話があったように、スタートアップの誘致の数もあると思う。道外から来ていただいて、北海道で解決する企業を増やすということや、アウトプットにはなるが、マッチングの数もあると思う。マッチングした上で実証していく数もある。実装までには実証という先行が必要で、その数を増やすことで社会実装に近づくので、実証の数であれば数えられたりすると思っている。そういったことをAIを利用して数えるということはあると思っている。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

形式的な確認だが、今ここに掲げられている目標値の①から⑦は既に走り始めてカウントされつつあるものなので、この文言は固定で、AI関連は純粋に追加するという事にならざるを得ないのか、それとも、例えば、スタートアップのところに半導体とAIの両方を混ぜ込むというようなことも可能なのか、仕立てとしてはどのように理解するのがよいか。

○事務局（浦田室長）

すでにある目標値とは別に追加するイメージ。この中に盛り込むよりは分けたほうがいいのかと感じている。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

アイデアベースだが、例えば、目標値の方針2の③や方針3の⑥は産学の話だと思うので、AI部分も追加することは可能かと思う。

⑥も、理系人材を北海道にもっと残そうということが大きいところで、今、施策とし

て半導体人材の育成をされているのは報道等でも見ているので、それにもう一步踏み込むことでパーセンテージを上げるのか、この目標値はそのままにしておいて、施策を増やすのかという議論もあっていいと思う。

私個人の意見としては、1本ぐらいAI関連の指標を増やし、残りの目標値については「ここは広げよう」という格好にしても良いと思う。

○事務局（浦田室長）

ご意見を踏まえて参考にさせていただきたい。

○北海道大学大学院 太田教授

全体を通して感じたのは、国際的観点がやや乏しいのかなということ。言葉の使い方だと思うが、次世代半導体をトリガーに世界に挑む、という感じがあると思った。

前田さんがおっしゃったように、北海道はすごく面白い島だ、ここはわくわくするぞ、すごいことが起きるぞというふうに見られたいわけです。その成果をどう測るのか、面白いことが起きて、いろいろなエコシステムが活性化して動き出したときに、どれだけ世界とつながることができるのか。例えば、外国企業や外国人エンジニアの来訪数は測ることができるし、国際的な要素をちりばめるとさらに魅力的になるのではないかと。

唯一、国際っぽいのがケーブルのところですが、それ以外にないので、何かないかなと思った。

○事務局（浦田室長）

確かに、サブタイトルに「世界に挑む北海道」とあるので、そこを反映していかなければいけないという思いはある。

ご存じのとおり、ラピダス社のプロジェクト自体は国際的な連携の下に進められており、様々な周辺のインフラなどを含めると国際的なつながりは外せないところはあるが、出口のところはどういうふうにつながっていくのか、そこの印象が薄いというのは太田先生のおっしゃるとおりなので、考えていきたい。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

エグゼクティブサマリーみたいなものは出る予定か。

○事務局（眞鍋主幹）

最終的に、改訂した後に概要版を作る予定。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

次回に間に合うのかどうか分からないが、エグゼクティブサマリーも我々に一度見せ

ていただいたほうがいいと思う。業務量次第なので、マストではない。

○中村座長

まだ言い足りないことやコメント、感想があればお願いしたい。

(「なし」と発言する者あり)

○中村座長

開催ぎりぎりに資料をお送りし申し訳なかったが、ご意見をいただきお礼申し上げます。
では、本日の意見交換はここまでとし、進行を事務局にお返しする。

(4) 閉 会

○事務局（眞鍋参事）

皆様からいただいたご意見を踏まえて検討し、改訂素案の内容をもう一度整理したい。
今後の流れとしては、パブリックコメント、道議会での議論を踏まえて、最終的に1月下旬を目途に案として取りまとめる予定。また、第3回有識者懇話会については、書面になるのか、お集まりいただくか、別途検討の上で調整をさせていただきたい。

改訂につきましては3月末を目指しており、状況につきましては、適宜、ご報告させていただきたいと思っているので、引き続きご協力をお願いしたい。

以上をもって、第2回有識者懇話会を終了させていただきたく。

以 上